

平成 27 年度 第 3 回 学校教育相談研修会報告書

私学教育相談部会 副部長 西ヶ谷信義

H28. 2. 23 <私学会館 5 F>

第 1 部

講師：静岡県臨床心理士会私学担当 八木 阿紀 氏

演題：「私学の緊急支援に対する調査」<アンケート結果から>

<アンケート回収率 71% 34校【東部9校 中部16校 西部9校】>

*スクールカウンセラーの勤務率 85.3%

うちスクールカウンセラーが臨床心理士である率 55%

*いじめ対策等を含めた組織がある 50%

*緊急支援の経験がある 21% → 突発的な事件が起こった時の対処が難しい。

大きな事件が起きた時に有料でも外部のケアチームを利用したいとの回答 70.6%

*スクールカウンセラーがいない場合、職員だけでは不安。

しかし、スクールカウンセラーは資格によっては得意分野も違い、不安を抱える場面もあり、また、彼等自体が事件の渦に巻き込まれることもある。

*マスコミ、保護者、生徒への対応では、全職員が同じように解答できるよう統一を図る。

*ハイリスクの生徒には「アニバーサリー反応」という、一年後に急に連想する様なことが起こることを伝えておく。また、保護者には、家が安全基地の役割を担えれば回復しやすいことも伝える。

*よくある二次加害として、本人の気持ちに添わない励ましがある。「いじめられた本人にも落ち度がある・・・」「もう忘れなさい」「もっと大変な人もいる」など気をつけて欲しい。話したいことを聞いてあげることが大切である。

第 2 部

講師：静岡県臨床心理士会私学担当 伊藤 千裕 氏

演題：「事例を通した教育相談の手立て」

*教育相談チームとしての機能という面では、現在50～60の勤務場所を持つが、同じ組織はひとつもない。機能が十分発揮されているところもめったにない。解決の糸口が見つかることもない。あの手この手を打っているのが現実であり、答えはないということ。

<事例検証>

ある新任教員が、メイクをしてきた生徒を注意したところ、泣いて学校に出てこなくなったと相談を受ける。家庭環境が厳しい状況であり、その子からすれば家より学校の方が居心地が良いため、学校は自分の場所であり、着飾るという『自己愛』の表現としては自然な行動ともとれる。ダメなのは分かっている、注意されるがまたやる。先生のことが好きであり、先生に対する『甘え』でもある。事件の日の前日または朝に、親か友人とのトラブルで、我慢の限界を越えた状況となり発散したい衝動に駆られ、コントロール不能となり抑制が利かなくなった。自分のせいで不登校になったと思わないこと。誰かが引き金になったはず。本人は申し訳ない気持ち、後悔の念を感じているはず。周囲への影響を考えれば、授業の後で、1対1で聞いてあげれば吐き出させたかもしれない。

カウンセリングマインドとして大切なことは、自分が自分の心を守れていなかったり、自分を大事にできていなければ、死にたいと思っている人の命は守れないということ。公共の場で、その言葉を聞けば、聞いた側はショックを受ける。病院は傷ついた人の集まる場であり、それが前提だが、学校は違う。日常生活の中に命に関わる言葉がポロリと出る。カウンセラーにとっても重大な問題であり、痛手も大きい。相談者との空間は、密室になりすぎないことであり、自分自身も守ることが大事だ。時間を区切ることも自分を守るセッティングとして必要だ。例えば「これから 15 分間、時間をとってます」とか、「〇時から〇時までです」など、「今から・・・」という相手のペースではいけない。ホームに持ち込むことだ。

また、常に相手を受け入れてしまうと、どんどん甘えてくる。相手にとって楽な方向へ流れれば、本人の自立を止めることになる。周囲に対して忠実な指導が必要であり、社会的常識を教えることである。「将来社会に出て困るよ!」・・・社会へ出て行くためのひとつの練習の場である。

普通の指導が伝わらないことは多いが、そのためにはチームを組むことが大事だ。仲間同士で助け合い、チームで守り支え合いながら、その時は精一杯やったということを認めてもらうこと、それが学校組織を守ることになる。学校の保身だけで何が出来るか、これでは生徒は守れない。

全てが成長する場所、居心地の良い場所である学校に「安全」は外せない。そのためにはルールがきちんと守られているかが大切になる。

<グループから>

男子工業系で、欲求不満やイライラを持った生徒、無気力な生徒が多く、動きの激しい学校であるため、今までも体育会系の指導を続けてきている。ややもすれば教育相談は甘いととられやすいため、生徒指導課との連携・連動が必要となると思うが、教育相談を立ち上げるための準備、考え方を教えて欲しい。

<アドバイス>

*欲求不満やイライラを感じている生徒は自分なりの発散方法で昇華し対処しているが、最近は何も力のない子が増えている。悩みを聞いてくれる人が少ないので抑圧することでモヤモヤが募り、フラストレーションがたまるのである。ストレスはけっして悪いものではない、ある程度必要なものであるが、たまにイライラを行動化してしまい、悪いと分かっているのに喫煙や万引きなどの問題行動に移してしまう。それだけ幼いということで、こうした短絡的な行動では成長は望めない。ただ、行動化してくれるのはある意味では関わりやすいとも言える。こうした生徒の行動の分析から始まり、教科を問わず先生方が情報をキャッチし、それを元に指導へと移っていき、アドバイスを受けながら教育相談としてのチームを立ち上げていくことが望ましい。

<アドバイス>

*親の役割を果たせない家庭に担任が介入した場合、親が先生に依存してしまうケースが多い。部活顧問など、絆が強い場合には肩代わりを依存してくるケースもある。理解のある親の場合は子供が前向きであるが、「親に言ってもしょうがない」という場合には、逆に子供が親を支えているケースもあるし、「あんたがしっかりすれば・・・」と娘に当たり散らす、子ども依存のケースもある。こうしてじっと耐えている子どももいるのだ。ここに至る長い歴史があるので、親の問題には踏み込まない方が賢明である。普通でない親に対しては、やりとりに注意し態勢を整えておく。

- * こだわりが強いとか、多動児など、発達障害は個性のひとつでさほど苦勞はしない。これに情緒面の不安定さがプラスされると難しい。親子関係から思春期にそれが出る。2～3歳から自我の目覚めの時に親が子どもの主張をどう受け止めてきたかに関わる。いわゆる「積み残し」というものである。担任ひとりでは難しいのでチームを組むことが大事だ。養護教諭にはなんでもよく喋る生徒もいて、そこで状況をつかむことはできるが、あまり一対一にならないよう、他の先生にも加わって頂くことが大切だ。ポロポロ話を出させるのではなく、「しっかり予約をしてカウンセリングをしてもらいなさい。」と働きかけることで少し収まるのである。自校では、クイックコンサルテーションを行っており、その日のうちにカウンセリングした内容を担任、主任、生徒指導、養護でフィードバックし、その方向性をアドバイスしている。椅子に座らず、スタンディングスタイルで行い、短時間で専門家同志のコンサルテーションを済ませる。家庭事情など先生方に知っておいて欲しいことは伝え、秘密にしなければならない点は、守秘義務として共有しておく。心理の見立て、問題の深さ等をアドバイスし、その心理と行動から背景を知り、指導や対策を練り、生徒指導的な処分が下り、その後良い方向へと向っていくことが望ましい。
- * カウンセラーも人材不足が現状であるが、それぞれの学校の個性を残した指導をしなければならない。カウンセリングをしていただく時は「公欠」なのか「欠課」なのか、その取扱いによっては、生徒が、サボれると感ずることもある。放課後を利用するとか、その場所もまた考えなければならない。
- * 父親のDVを経験した子は、それがトラウマとなり再体験を恐怖や不安として抱えることになる。友達の喧嘩の仲裁に入ったはずが、それに巻き込まれたりしたケースもある。また、先生の大きな声や、ある先生の姿を見ただけとか、すれ違っただけでパニックを起こしてしまうこともある。その場合は、あまり無理をさせないことと、苦しかったら会わないような対処をしてあげ、二次三次のトラウマを作らないことである。また、こういう大人になりたくないという反面教師にプラスして、こういう人になりたいと思わせることで立ち直ることもある。虐待されてきた子は、常に怯えを感じているが、それに流されて生きるか、受け入れるかは自分次第である。
- * コミュニケーション能力不足とよく言われるが、難しいのは親子関係でのコミュニケーション不足である。どこまで話し合っただけでやめていくか、自分の身を守りながらどこで線を引くかである。日々の細かな出来事や、小さなトラブルをいかに丁寧に扱って行き、小さな芽のうちに摘んでいけるかが大切である。予防が最大の武器であり、それが、その時に試されるのである。